

---

# 永遠の午に咲いた薔薇

ウル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠の午に咲いた薔薇

### 【Nコード】

N5358U

### 【作者名】

ウル

### 【あらすじ】

クナルフの外れ、潮風の吹く岬に立つ古城 鐘の城。とうに打ち捨てられたはずのその城から、名高い時計師ドニス・オツフェンバツクの工房にある壊れた懐中時計が届いたのはちょうど一年前のことだった。時計師の少女ガブリエルは、修理を終えた時計を携え父の代わりに赴いたそこで、一人の少女と出会った。絢爛なる調度の数々と、時を刻む無数の時計。そしてこの、めぐりつづける永遠の中で。咲き誇るあなたは 白薔薇。あなたは孤城の一輪花。友人よりリクエストを受け執筆したもの。ぬる百合。転載作品。

縦書きPDF形式での閲覧を推奨します。

(前書き)

くら様に捧ぐ。

時計が止まるとき、時間は生き返る。

ウィリアム・フォークナー

あなたのあいした花の名は。

街道をゆく一台の幌馬車。この先の村で売りさばく品なのだろう。荷台には酒樽をはじめとして、干し肉や野菜、小麦などの食料品、加えて毛皮や織物など、間近に迫る冬に備えた雑多な品々が積まれていた。それらが放つとりどりの香りが陽射しに温もる幌の中で溶け合っている。

荷台に置かれた酒樽のひとつにもたれかかっているのは少女だった。短く切った黒髪とまつすぐな眼差しが印象深く、分厚い革ブーツと吊りズボン、麻のシャツに粗作りな汚れた職人着、大きな荷物など、一見するとまるで青年だ。少女らしさを伝えるのは、華奢な首や、わずかにふくらんだ胸元くらいであろう。

「しっかし、わざわざこんな辺鄙へんびなとこまでやって来るとは、嬢ちゃんも物好きだよなあ」

ふと、馭者台きょしやだいで馬を操っていた四十がらみの男が振り返った。

「俺が知るかぎり、ここらにゃあんたが見て面白いもんなぞなにもありやせんと思っただが」

「まあ……そうかもしれませんね」

強い訛りなまの入った男の口調は打ち解けていたが、対する少女の反応は煮えきらず淡泊であった。北の町で道行きを共にすることになつてから数日、こうして旅を続けてきても、彼女の頑なな態度は変わる事がなかった。少女ゆえの警戒というのであれば、当初男が勘違いしていたものをわざわざ訂正することもなかっただろう。

「うーん、嫌われちまったか」行商人の男は前に向き直ると、いたって快活に笑った。

「……そういうわけではないです」

向き合っているわけではないのに、少女はいたたまれなくなったように、視線を逸らした。生真面目な顔がかすかに曇る。

「ははは、すまん。冗談さ。だがあんたも、そんなに肩肘張つてたら疲れちまうんじゃないか？」小声であつたからか、あえて聞かないふりをしたか、男は前を向いたままで言う。「そうだ。いい葡萄酒があるんだが、飲むかい？」

後ろ手に革袋を差し出され、少女は驚いた顔で男を振り返る。結局は遠慮して断つたが、

「あの」

「どうかしたか」

視線を落とし、わずかに逡巡しゆんじゆんしてから、少女は結局首を振るにとどめた。

「いや、なんでもありません。ごめんなさい」

「そうか。ま、気にすることはないさ。あなたにも色々事情があるんだろう。こつちこそ、つまらんことを言つちまつてすまねえな」

「いえ、私の方こそ、本当に……」

それきり父娘のような歳の二人の会話は尻切れに途切れ、二三の手続き上の言葉以外に長く交わされることはなかった。

馬車は夕刻過ぎに目的の村へと到着した。荷台を降りたときに男がかけた達者でな、という言葉に、少女がふたたび俯いて謝り、二人は別れた。

その古城が築かれたのがいつの時代のことか、はつきりした答えはない。城はクナルフの南西、ある岬の突端に、三方を切り立った崖に囲まれて立っている。それゆえ城へ至る唯一の道は、両側から森に食いつくされながらかるうじて名残を留める、申し訳程度の獣道だけであつた。固く閉ざされたくろがねの門扉もんひ、砂色に褪あせた郭くわくわ、

シャトー・クロシュ  
鐘の城 の呼び名の由来である高く聳えた鐘楼 特徴的な建築  
様式の荘厳な佇まいは、革命の以前、遙かな昔を思わせるのに十分  
だった。

はたしていったい誰が、いつ、なにゆえこのような僻地に城を築  
いたのか。いまやそれを知るのは岩礁に碎け散る波と海鳥ばかり。  
鐘の音の絶えて久しい 鐘の城 は、あとはこのまま何事もなく、  
ゆるやかな時の流れの内に風化してゆくものと思われていた。

つい一年前までは。

少女の父、ドニス・オツフェンバツクの工房にその懐中時計が届  
いたのは一年前のことであった。エナメル文字盤、細身の数字、  
ア・ポム針。飾り立てないシンプルな文字盤に比して、美しい彫金  
の施された金のケースには惜しげなく宝石が用いられており、目敏  
い誰かの手に奪われずここまで届いたことが、奇跡と思われる逸品  
だった。しかし、オツフェンバツク工房の親方時計師ドニスの、時  
計師としての目にだけは、その時計の真価が別にあることがわかっ  
ていた。きらびやかな装飾と裏蓋の奥に秘された、精緻で、巧妙で、  
ユーモアに満ちた内部機構。時計製作の技術においては大国シルグ  
ニアと並ぶクナルフの、当代最高の時計師と名高いドニスですら、  
兜に指をかけるほど、それはある種この世ならぬ作品であったのだ。  
壊れている、という一点を除けば。

整然と協同する歯車、脱進機、テンプ、加えていくつもの驚くべ  
き複雑機構。そこに現れた極々微細な歪みを、ドニスはほとんど靈  
感とすべきものによって見いだしたのだった。

壊れた時計とともに届けられたのは、これまた華美な、貴石と細  
工、技巧を凝らした ただし前者のものと比べれば見劣りがし、  
また、壊れてはいない 美しい懐中時計で、同封された手紙には  
それを一つ目の時計の修理代に充てるようにと書かれていた。手紙  
には加えて、時計の不具合についての見解が丁寧な筆跡で綴られて  
おり、送り主もまたかなりの目利きであることが窺えた。

ドニスはほとんど二つ返事で依頼を受けた。もちろん金銭のこと

でいえば、王も認める彼の工房には既にかんりの修理と新作の注文とが溜まっており、実際には新たな仕事を受注する余裕も理由もなかった。工房の経営役などは、余計な仕事を背負い込んで他の依頼に支障が出ては困ると、露骨に眉をしかめたものである。しかしそれでも、尽きることのない仕事の合間を縫い、寝食を削ってまで彼を修理作業に没頭させたのは、その一流の時計師としての誇りと探求心であったのだろう。

そうして一年。ドニスは工房を抜け出せない自分に代わって、将来を嘱望される時計師である自らの娘ガブリエルを、依頼主の下へ送り出したのだった。

行き先は 鐘の城。とうの昔に打ち捨てられたはずの古城へ向かう彼女の手には、何者とも知れぬ差出人による依頼書とともに、ふたたび正しい時を取り戻したあの懐中時計があつた。

日の出前に村を经ち、東からじりじりと高度を上げる太陽を横目に見つつ数時間。とうとう森を抜けたガブリエルの前に現れたのはこの頃では稀に見る偉容の古城、鐘の城。砂色の郭も、それを越えて頭を覗かせた鐘楼も、赤錆びたくろがねの扉も、どれも噂に聞いていた通りの姿だった。異なるのは唯一、門が開かれていることだけか。彼女は背中の荷物を背負い直し、潮風になびく髪を押さえつつ、馬一頭分ほど開いた扉へ歩き出した。

郭の中では、かつての栄華の名残たる、涸れた噴水や朽ちた石像、萎れた花々、生け垣などが、流れる時に取り残されたようにならびれた風情で佇んでいた。いまは荒れているとはいえ、往時は砦のよくな敵めしい外観にそぐわぬ、絢爛な庭園であつたのだろう。郭の内に城を築いたというより、城の周囲に郭をめぐらしたといった趣、敵の襲来よりも、城の内部のものが失われてしまうことを恐れたかのような、何かを隠そうとでもしているかのような印象を受ける。彫像たちの合間に伸びる道には玉砂利が敷き詰められており、足を踏み出すたびにざりざりと、空々（そらぞら）しい音を郭に反響さ

せた。

庭の向こうの石造りの居館きょかんは鐘楼と一体になっていた。見れば見るほどに威風堂々たる姿である。ここからだ、鐘楼の鐘はめまいのするほど頭上にあり、長い間潮風に耐えてきた石壁は、ずっしりとこちらにのしかかってくるようだった。小さな領主の城などはまるきり違う、途方もない年月を越えてきた石組みの風格は、ちっぽけなガブリエルひとりを圧倒して余りあった。

「なあに、子どもじゃない」

唐突にかけられた鈴のような声。ガブリエルは驚いて声の主を顧かえりみた。彼女のすぐ後ろ、玉砂利の道に沿うようにして並んだ彫像のひとつ、楽器を携えた乙女像の台座に、美しい少女が腰かけていた。白い。白かった。身にまとう絹地に銀系のドレス。風にはためく袖そでと裾すそから伸びるすらりとした手足、開いた襟から覗く胸元、華奢きやしやな首、小作りな面おもて。肩を流れる長く細い髪。どれもが見事なまでの白であった。光を透かす氷細工のようなその姿の中で、淡く色づいた唇と空を映したように青い目だけがさやかに、さしずめ象嵌ぞうがんされた宝石のごとく際立っていた。

二人の少女は互に見つめあった。白い髪の一方は興味深げに、黒い髪の他方は、降り注ぐ陽光のまぶしさにひととき言語を失したかのように。そうしてしばし沈黙のままに時が流れた。

先に目を逸らしたのはガブリエルだった。なぜだか急に、自分の服のみすぼらしさが気になり始めたためである。

喉が乾いていた。んん、とひとつ咳き込んでから尋ねる。

「……あなたは？」

「わたしは 白薔薇 。貴女あなたは、わたしの城になんの用かしら？」

「あなたの、城？」

戸惑うガブリエルに、白薔薇 と名乗った少女はこくりと頷いて微笑した。

「そうよ。わたしがこの城のあるじ。この庭も、この像も、あすこの噴水も、鐘楼も、愛らしい時計たちも、やわらかい寝台も、壁の

タピスリーもわたしだけのもの。そうそう、タピスリーといえば、それはあの女将軍が騎士たちを率いて、東方の蛮族を打ち破ったときの姿を描いたものでね。とっても綺麗だから、貴女もきつと見てゆくといいわ。ああでもやっぱり、いっとう素晴らしいのは時計たちね。ああ、ほんとうに。わたしの可愛いオルロージュ」

夢見るように滔々(とうとう)と語り続けていた少女がはたと言葉を止めた。ガブリエルを見つめ、細い眉をきゆうつとつづめる。少女らしいみずみずしい肌に刻まれた深い皺は、なかば虚構じみているほどだった。むっとした表情のまま、彼女は心なしに顎を反らす。

「……なあに。なにか、おかしくて？」

「おかしくはないけど、でも、お父様やお母様は？ この辺りに住んでいるんだとしたって、勝手にこんなところまで出かけたら心配するだろうし、それに、城の人にだって怒られるでしょう？」

ガブリエルの口調がまるで幼い妹に向けるそれとなったのも無理はない。少女の見た目はどう見てもせいぜい彼女より四つ、あるいはもっと下であったから。ロース・ブランシュ白薔薇なんて名前を自分につけて、

古城のあるじを名乗るだなんて きつと姫君にでもなったつもりでいるのだろう。いかにも童話や空想めいた、子供らしい遊びではないか。

しかし少女には、彼女のその態度がいたく気に障ったらしい。眉間の皺はますます深くなり、頬はほのかに紅潮し、花弁かべんのような唇は強く引き結ばれた。それでも反論する口調は高ぶることがなく、年不相応な自制心の見えるものだった。

「この城は間違いなくわたしのものよ。わたし以外のものであるはずがない。それに、父も母もわたしにははじめからいないわ。だってそうでしょう？ 薔薇に母や父がいて？ それとも、貴女は、わたしが嘘をついているとでも？」

ガブリエルは目の前の少女に、わずかならず気圧されていた。なんの根拠を示すでもない。だが、少女は断固とした確信をもって自

らの正当を主張する。細い体と青い目にみなぎるのは傷つけられた誇りに対する静かな怒り。それはまるで高貴な育ちの猫のよう。そう、あるいは、かような城に住まう、まことの姫のよう。

若い時計師の見守る先で、先ほどからぶらぶらと揺れていた少女の両脚がぴたりと止まり、そしてまた弛緩した。はあ、と彼女はため息をついて、石の乙女に寄りかかった。

「ごめんなさい、あなたに怒っても仕方ないのよね。貴女が信じられないなら、わたしがなにを言ったって無駄なんだから。でもね、言い訳させて。今日は、クナルフ最高の時計師様が訪<sup>よ</sup>われる予定なの。だからわたし、我慢しきれなくて、朝からずうっとここで待っていたのだけど、午<sup>ひる</sup>を過ぎてもなかなか来られないものだから、すこし、いらいらしてしまっていたのよ。ごめんなさい」

少女の言葉にガブリエルは面食らった。あっさりと彼女に頭を下げる態度は、いとけない外見に反して奇妙に大人びて、いっそ不気味ですらあった。

ガブリエルは自分でもいぶかしんでいたものの、尋ねずにはいられなかった。

「……じゃあ、まさか本当に、あなたがうちの工房に、あのトゥールビヨンを送ったっていうの？」

効果はてきめんだった。「あら」少女は兎のように背筋を伸ばし、目を丸く睜<sup>みは</sup>った。輝いた青い瞳には、今まで彼女がガブリエルに見せてきたものとはまったく違う、はつきりとした喜びと驚きの感情があり、それが彼女を皮肉にも初めて外見相応に見せていた。

「貴女、じゃあ、もしかして、貴女が？ ああ、ごめんなさい。失礼してしまっただわ。こんな場所からなんて」

少女は台座から慌てて飛び下り、身だしなみを確認すると、たじろぐガブリエルにも構わずすたすたと歩み寄ってきた。靴は履いていなかった。

「ああ、でも、オツフェンバック様は男の方だと聞いているわ。貴女……？ でもその髪は……じゃあ」

「待つて。ちよつと、落ち着いてよ」

ガブリエルは馬をなだめるように、両手を少女に向ける。

「私はガブリエル。ドニス・オツフェンバツクは、私の父よ。父は忙しいから、私が代わりに届けにきたの」

「じゃあ！」ガブリエルが終わりまで言う前に、少女は小さく叫んだ。はつと口を手で塞ぎ不躰ぶしづけを恥じらう。かすかに震える手を胸にあて、ひとつ息を整えると、少女は期待と不安をない交ぜにした目でガブリエルを見つめた。「じゃあ……オツフェンバツク様は、あの子を直してくれたのね？」

いつの間にかすぐそばにあつた少女の顔を、ガブリエルはどうにもまともに見ることができなかつた。あまりにもまぶしい。「そう直つたよ」彼女は少女から目を逸らしたまま頷き、「ちよつと待つて」と背中せなかの荷物を下ろした。

ああよかつた。傍らで息をつく少女にちらりと視線をやつてから、ガブリエルは背負い袋の上にかがみ込み、奥から粗末な木箱を取り出した。蓋を開けば、やわらかいボロ布と油紙とを九重ここのえに重ねた、小さな包みが現れる。耐衝撃装置パルシュットが組み込まれているとはいえ、やはり時計にとつて衝撃と水分は天敵であり、また、一目で値打ちものわかる時計を人目に晒すわけにもいかなかつた。そのせいであの気のいい商人には、しかし何よりガブリエルは彼に気のいい商人のままできてほしかつたのだ。いつだつて金の輝きは人を狂わせるものだから、ずいぶんと非礼な態度をとつてしまつたのだが。少女もそれらのことは承知済みなのか、特に戸惑つた様子もなかつた。

「では、それが」

「そうよ」ガブリエルは頷く。

丁寧に組紐を外し、包みをほどいてゆく。やがて幾重にも重ねられた布と油紙の中から、黄金と貴石のまばゆい輝きがこぼれ出した。少女がああ、と息を飲んだ。ガブリエルもその美しさに改めて目を奪われた。けれどその目は本当のところ、流麗な数字の並ぶ文字

盤を透かし、その奥で噛み合う複雑で精緻な機構のほうにこそ向けられていた。天才時計師ドニス・オツフェンバックが細やかな修正と調整を重ねた、幾多の金属パーツは、いまはむろん動きを止めてはいるものの、まるで力を溜めるしなやかな獣のように調和し緊張しつつそこにある。ひとたびゼンマイを巻き上げてやれば、彼らは針先ほどの狂いもなく協調し、この世に二つとない尊く貴重な時間を紡ぎ出し始めるだろう。

真に優れた音楽は、真に優れた奏者によって奏でられてこそ、そのまことの魅力を引き出される。時計も同じだ。悔しいけれど、とガブリエルは思う。私では決して、この小さく神秘的な精密機械の内に秘めたる本当の輝きを引き出すことはできなかつただろう。ドニスはガブリエルにとって師であり父である以上に、優れた、そして越えられぬ才能を持った同業者だ。その彼の手によって調律された時計はこうして、飾られたうわべだけではなく、内側からも燦然と光を放つ。悔しいけれど、時計師としてのガブリエルの目から見ても、これは至高の品なのだった。

「ガブリエル」

少女の声でガブリエルは物思いから覚めた。彼女は束の間とはいえ時を忘れていた自分に驚き、そしてすぐに気恥ずかしさに襲われる。

「ごめんなさい。つい」

物思いの内容もあつて余計に頬が熱くなる。弁解がましく言つて立ち上がったガブリエルに、少女は微笑でもつて応じた。

「いいの。貴女もその子の美しさがわかるのね。そう……私だってそうよ。幾度見たつて、見蕩れてしまう」

「ん……うん。そう、そうね」

本当は、そんな純粋な感情などではない。目の前の時計を通り越してガブリエルが見つめていたのは、実の父に対する、その天才に対する愛情と誇らしさ。そして水に垂らされたインクのようにたなびき渦巻く、醜くて卑小な、嫉妬と憎悪。そんなふうになんか色々なもの

が彼女の中ではない混ぜになっていて、だから、「やっぱり」と目を細めた無垢に、ガブリエルは息が止まる思いをした。胸が痛いほどに打ち、体が火照る。頬が熱を帯びる。見蕩れるというのなら、美しいというのなら、あなたこそがそうではないか。白薔薇。しろばら。古城の姫君。その穢れを知らぬ白さは、まっすぐに見つめるにはやはりまぶしすぎて。

これ。栓無き思考を振り払うように、ガブリエルは少々ぶつきらぼくに懐中時計を突き出した。白薔薇 はちよつと驚いたような顔をしたが、すぐに自然な微笑みを取り戻した。オイルと金属、削り盤を始めとする金属加工器とに荒れたガブリエルの手に、雪のような手のひらが重なる。滑らかで、潤い、おおいことのほか体温の高い手だった。触れられた場所から未知の感覚が肌を伝って広がった。

「ありがとう」

白薔薇 はそう言って時計を受け取ると、ぎゅつとかき抱いた。

ああ、と、唇からため息が漏れた。少女は目を瞑り、時計を握りしめ、安堵に身を震わせる。それはまるでひもじさをこらえるように切なげで、いたわしげで。ガブリエルには、彼女がこの時計へ注いでいた並々ならぬ愛情が見てとれた。ああ、よかった。ほんとうによかった。また幾度かそつとつぶやくと、ふるふると小さな頭を振って。それに合わせて、白い髪が光の中できらめいた。少女は花が咲きこぼれるような笑顔でガブリエルを見上げた。

「ありがとう、ガブリエル」

白薔薇 がそう言った次のときには、彼女の体はガブリエルの視界からは消えていた。代わりに熱くやわらかなものが胸の中にあつた。華奢で、壊れやすく、繊細なもの。背に回された腕は細く、重みは限りなく無いに近い。花のにおい。ありがとう。よかった。ほんとうに。白薔薇 は小さな頭をガブリエルの胸に寄せ、そうして、彼女のシャツをほんのすこし濡らした。しろばら。どうしてそんなに。あなたはどうしてないているの。この時計はあなたにとつてなんだというの。あなたはいつたい、だれだというの。胸の

中の少女へのいとおしさと同時に、数多の疑問がガブリエルの心に去来した。しろばら。ガブリエルが言葉にならぬ言葉の代わりにためらいがちに手を伸ばし、白い髪を指で梳すいてやると、白薔薇はむずかるように体を揺らした。ごめんなさい、と言った。ごめんなさいガブリエル。わたし、こんなつもりじゃなかったのだけど。

「だけど。おねがい。もうすこし、こうさせていて。」

いいよ、しろばら。わたしでいいなら。ガブリエルは壊れそうな少女の背に腕を回し、ぎこちなく抱き寄せた。白い髪に頬を寄せると、甘く、そしてすこしだけ胸が詰まるような、太陽と砂糖菓子と、シナモンの匂いがした。薔薇の香り、なのかもしれないかった。

石の一角獣リコルヌの足元に揃すって座る。押し寄せる時の力は強靱で執念深く、天を突くその高潔な獣の角すらも、ついにはなかばからへし折しってしまったようだった。前脚を掲たげて嘶いく彼の目は、南から急速に膨らんできた黒雲を威嚇するように見据まえていた。ガブリエルの隣に座る 白薔薇 は、一角獣の後脚に背を、ガブリエルの肩に頭とをもたせかけ、時計に通した金の鎖をしゃらしゃらともてあそんでいた。ガブリエルの方は彼女がすすん鼻を鳴らすたび、白い髪をなだめるように撫なでてやっていた。

あれから、ごめんなさい、と繰り返しながら、白薔薇 はガブリエルの腕の中で泣きじゃくった。彼女が謝るたびに何度でも、ガブリエルはいいよ、と返した。ないていいよ、しろばら。涙はもう止まったものの、陶磁とうじのような頬ほと眦まなこにはまだほのかに朱が残のこって見えた。ガブリエルは彼女を気遣きづいながら、きいていい？ と尋ねた。間まがあつてから、こくり、と少女は頷うなく。

「どうして、泣いたの？」

手の中の時計を見つめる横顔がびくりと硬直するのがわかり、彼女は率直に訊き過ぎたかと後悔した。

ガブリエルがもう一度口を開きかけようとしたときだ。

「この時計は」

白薔薇 は視線を落としたまま言った。声はか細く震えていて頼りなく、初めのときのあの鈴の音、そして饒舌<sup>じょうぜつ</sup>で自信に満ちた話し振りとはずいぶん違っていたが、その芯にある強さはまだ失われてはいないようだった。

「うづん。ちがう」

白薔薇 は首を振った。ちがうの。そうじゃないの。少女はもどかしそうに唇を噛む。苦しげに眉を寄せた表情は、またふたたび泣き出してしまうそうに見えた。ガブリエルはいたたまれなくなり、彼女の細い肩に手を置いた。

「話したくないなら、いいよ。無理をしなくて」

「ちがうの。ちがう。無理をしているわけじゃないの。だけど。ただ、うまく、どう言ったら……どう言えば、わかってもらえるのか……どうしたら、ガブリエル、わたしを、」

見上げる潤んだ目には、不安と、いまにも溢れだしそうな強い感情が混じっていて。ガブリエルはいとおさに駆られるまま、少女の眦に溢れる涙へと手を伸ばした。両手で頬を挟んで、親指でわざと乱暴に拭ってやる。「言って、白薔薇。あなたを？」努めて穏やかに、ガブリエルは微笑いかける。

「……こわいのよ」

「なにがこわいの？」

白薔薇 の言葉は要領を得なかったが、ガブリエルは気にすることなく尋ねた。なにがこわいの。少女はガブリエルの手のひらの中で何度か唇を開きかけたが、けれどまたそのたびに、歯噛みするように目を伏せた。こくりと細い喉が鳴った。くすんと鼻が鳴った。

「白薔薇」

ガブリエルはそう言って、少女の小さな体を抱き寄せた。やわらかい薔薇の姫。こんなにも温かくて甘い花の香りのする、しろばら。赤子をあやすようにガブリエルは少女の名を繰り返した。しろばら。だいじょうぶ。しろばら。あなたをくるしめるものをおしえて。しろばら。

「……貴女に嫌われたくないのよ。ガブリエル。嫌われてしまうのが、とても、こわいの」

彼女はかろうじてそう答える。

「どうしてわたしがあなたを嫌いになるの。そんなことがあるはずないでしょう？」

けれど 白薔薇 はガブリエルの胸を頼りない力で押して、腕の中から抜け出した。思ってもみない拒絶に驚いたガブリエルは、かぶりを振る少女をじっと見つめた。ちがう。ちがうの、ガブリエル。貴女は何も知らない。貴女は、まだ何もわかっていないのよ。

「ガブリエル。わたしは、」

わたしは、にんげんではないのよ。

棄てられた教会や寂れた墓地、廃屋、路地裏、埃臭い地下や物陰。光を恐れ、闇の内にわだかまり、影から影へとさ迷い歩くものがある。否、いた、というべきか。

革命以後、彼らの多くは闇の内から引きずり出され、白日の下に暴かれて、とるに足らぬ迷信と妄想の産物となり果てた。人々はさながら扼殺やくさつのごとくじわじわと、けれど確実に彼らを包囲し滅ぼしていったのである。

それというのも、すべて人々が新たな信仰を手にしたゆえだ。十字架や讚美歌や聖典、祈りすらもいらぬ彼らの新しき神を人は理性と呼んだ。その光は闇を底までくまなく照らし出し、蒙昧もつまいから啓ひらかれた人々の目に、暗がりにうごめくものどもの正体を焼きつける。恐怖は無知から出づる。そしてその恐怖というヴェールを剥はがされたあとに残るのは、朽ちた木の枝、野犬の眼、葉ずれや風鳴りにすぎないのだ。

白薔薇 もまた、そうした彼ら闇のものたちの眷属けんぞくであるのだという。

かつてこの世に機械時計がなかった頃、人々の多くが時間という概念を持たずに日々を生きていたように、結局のところ誰からも存在を信じられないものはもはや存在することができないのだと。少

女は自らの一族が滅びた理由をそう締めくくった。

「生き残ったのはわたしだけ。可笑しいわよね。死ぬことも、生きることもしないくせに、生き残る、なんて」

おそろしいわよね。

白薔薇 の唇に、自嘲めいた笑みが浮かんだ。

ざあ、と雨が降り出した。

雨を逃れた二人を出迎えたのは、狂気じみて絢爛な城だった。

天井から下がるクリスタルのシャンデリアが、壁に掛かった武器や物言わぬ甲冑に金属の暗い輝きを与え、無数の絵画や綴れ織りの壁掛けへ影を落とす。石壁に切られたいくつもの窓にはすべて、錬鉄の窓枠と透き通ったガラスが用いられ、空を覆うどす黒い雲がよく見えた。白薔薇 に先導されて進んでゆく廊下や部屋もまた、雑然と置かれた貴族風の調度の数々や、無秩序に配置された胸像、剥製などによつて、不調和で混沌とした、ある種の美を醸し出していた。はたしていったいどれほどの情熱と財産と狂気とがここにつき込まれたものか、ガブリエルにはにわかに判じがたく思われた。

しかし、それらの品々を遙かに圧倒する数と質でこの城を支配しているのは、大小幾千という時計たちだった。壁掛け時計、柱時計、置時計や懐中時計、クロノメーターや天文時計などの機械時計の他にも、非常に凝った装飾を施された日時計や水時計、天球儀やトルクエタム、アストロラーベまで、原始的なものから非常に洗練された機構を備えたものまで、ありとあらゆる時代、ありとあらゆる場所で作られた計時装置がこの城に集っていた。それゆえ城の中はどこへいっても、振り子が振れるひゅん、ひゅんという音、機械人形の叩くカリヨンが紡ぎ出す賑やかな旋律、銅鑼の音、香箱ガブリエが立てるかすかな音や輪列のささやき、脱進機のこすれ 慣れている者でなければ数日と経たず発狂するであろう無機質で単調な音 に満ち、あたかもある一つの抽象的な音楽のごとく城全体を共鳴させていた。各々無数の部品で形作られた機械たちが、総体として一個の

複雑な協同体と化したそのさまは、どこか生命というものの模倣を  
思わせずにはいられなかった。

けれどこうした豪華な装飾と珍しい時計の数々も、ガブリエルの  
気持ちを浮き立てるのにはまったくといって役立たなかった。白  
薔薇 があれからずっと黙りこくっているからだ。

かといって、自分の方から言葉をかけるのもガブリエルには躊躇  
われた。どうすればいいというのだ。仲間たちを失い、死すらも許  
されない、生きることさえも許されないというその少女に、自分は  
どんな言葉をかけてやれるというのだ。

そしてなにより、本当に恥ずべきことだが、ガブリエル自身がま  
だあの告白を受け入れきれていなかったのであった。この浅ましい  
裏切り者。嘘つきめ。ガブリエルは心の中で自分を罵った。いつそ  
白薔薇 がそうしてくれたならばどんなにいいかと望んだけれど、  
白い少女はただ黙々と歩みを進めてゆくのみだった。

やがて二人は居館の奥、白薔薇 の部屋へと辿り着いた。壁は  
幾重にも重ね合わせた淡いブルーの絹に覆われ、最初に言っていた  
あのタピスリーも、燭台の光に照らされて浮かび上がっていた。こ  
れまで見てきたきらびやかな装飾品や時計たちも、この部屋にはほ  
とんどなく、いくつかの落ち着いた調度類が置かれているだけであ  
る。中でもとりわけ大きなものは天蓋付きの寝台で、銀糸を織り込  
まれ垂らされた紗紗は 白薔薇 自身と同じ雪のような白だ。少女は  
硬い表情のままそこへ腰を下ろした。

「ねえ、白薔薇」

ガブリエルがその名を呼んだのは、彼女の隣へ腰かけてからどれ  
くらい経ったときのことか。

「どのくらい……ひとりで？」

「わからないわ」

白薔薇 は首を振った。可笑しいでしょう。ここにはあんなにも  
たくさん時計があるというのに。またあの寂しげな笑みを少女が  
浮かべようとするとするから、ガブリエルは「だからなんだね」と言葉を

つなぐ。その視線は 白薔薇 の首にかかった懐中時計へと向けられていた。

この時計はずっと、この少女の傍らにあったのだ。ドニス・オツフェンバツクをクナルフ最高の時計師と呼んだことから考えれば、白薔薇 は長ければ二十年近くも、幾千の時計たちだけを友に過ごしてきたことになる。

扱より所だったのかもしれない。彼女と共に果てのない長い時を生きてくれるのは、もはや時自体、それそのものだけだったのかもしれない。城じゆうにひしめく時計たちを一つひとつめぐり、鍵を挿し込み、ゼンマイを巻き上げ、磨き、慈しみ、語りかける。それだけが彼女の呪わしき無限の生における、唯一残された意味であったのかもしれない。

どの推測も間違っているのかもしれないし、あるいはまた、正しいのかもしれない。ガブリエルのからうじて想像できうるのは、もう一人の自分ともいうべきこの時計が壊れたとき、彼女がどれほどの衝撃を受けたかということだけ。ただそれだけ。それ以上のことは。もう。

「わたしは」

白薔薇 が口を開いた。

「わたしは、時計たちをあいつている。憧れているの。時を刻んでゆく、前に向かって進んでゆく。体をふるわせて、いくつもの歯車をきしませて、動いてゆく。まるで生きてみたいに」

だから、と少女は続ける。

わたしはこの子たちをあいつている。

そして、同じくらい、憎んでいる。

「あなたたちになげんのことだって、そう」

嫌になったでしょう。わたしのことが。この、ばけもののが、白薔薇 は言った。皮肉げな笑みはもうなかった。代わりに硬貨のような目が二つ、壁にかけられた鏡を見つめていた。ガブリエルもつられて鏡の向こうを覗き込み、そこに人形のような少女を見い

だした。不安と疼痛とをちっばけな瞳に押し込んで、必死にこらえようとする、老いることも死ぬこともなく、それゆえに生きることすらできぬと自嘲する、あどけなく、けれど心だけは老いずに、傷つかずにはいられたかった少女の姿を。

ああ、なんて。くるおしい。

「白薔薇」

私も同じだよ。しろばら。

背中から抱きしめると、やはり甘い砂糖菓子のおいがして、ガブリエルの胸は衝き上げられた。長い間息ができなかった。激しい感情はときとして人を殺せるほどの力を持てるのだと、彼女はそんなとき初めて知ったのだった。

たとえこのまま死んでしまったって、かまわないけれど。

「なにが同じだというの」

ガブリエルの腕の中で 白薔薇 がつぶやいた。語尾は震えていた。

「白薔薇」

穏やかに呼びかけるガブリエルを、 白薔薇 はキツと振り返る。その目はしかし刹那、おののいたような色を浮かべてそこに立ち尽くした。彼女を迎えるガブリエルの眼差しが、あまりにも優しかったからかもしれない。

「白薔薇」

「やめて！」

ガブリエルの腕と眼差しを振り払い、身をよじって、 白薔薇 は抱擁から抜け出した。壁際まで逃げるように走り、振り向いた少女の目は涙で濡れていた。胸元で金の時計が揺れる。

「わたしと貴女は違う。貴女に、わたしのことがわかるはずがない。そうよ。わかるはずなんてないの。なのに、なのに貴女はどうしてそんなことを」

同じだよ。

ガブリエルは落ち着いた声で 白薔薇 を遮った。

「私も同じなんだよ。いとおしくて、にくらしいよ。図面を引いているときも、部品を削り出すときも、磨いて、螺子ビスを止めて、組み立てて　こんなものが無ければ、こんなものさえ無くなってしまえば、私が父さんを憎まなくてすむんだって、自分の力や才能に絶望しなくてすむんだって思うとね、ときどき、全部壊してしまいたくなる。ぐちゃぐちゃにして、全部なかったことにしたくなるよ。だけどさ、だけどさっぱり、私は好きなんだよ。どうしようもなく好きなんだよ」

「そんなこと　それと、私のことは違う」

白薔薇　は必死で首を振る。

「そうかな」

ガブリエルは立ち上がり、白薔薇　のもとへ歩き出した。ガブリエルが近づくのを見て、少女はおびえたような表情を浮かべたが、ガブリエルは構わずに微笑みかけた。しろばら。わかったんだよ、しろばら。

「嫉妬したって、憎んだっていいんだよ。それも私で、それもあなたなんだよ。白薔薇　。苦しければ泣いたっていい。腹を立てれば怒ったっていいんだ」

だってね、しろばら。あなたが泣いたとき、そうしていま、そんなふうに怒ったとき、恨んだとき、憎んだとき、私はそれをいとおいしいと思っただよ。しろばら。美しいものだけじゃないんだよ。あなたの中の醜いものだって、全部、全部いとおしかったんだよ。くるしいくらいに、あなただったんだよ。

「……でも、だけどわたしと貴女は違う。あなたはにんげんで、わたしはそうじゃない。わたしは、生きることも死ぬことも、なにひとつできないんだから。わたしの時は、永遠に止まったままなんだから」

「わかってないね、あなたは」

「なにが」

続く言葉は抱擁によって遮られた。きつく、熱い、抱擁。細い首、

薄くやわらかな背、先ほど暴れたせいで露あらいになった白い肩口。すべてを。ガブリエルは 白薔薇 を壁と自分の体とに押しつけ、荒々しく、すべてを奪おうとするかのような、飢えた抱擁をする。 白薔薇 の目が戸惑いと驚きを映して揺れる。

「……痛い。いたいわ、ガブリエル。ねえ」

あなたの時計は時を刻んでいるでしょう、しろばら。こんなにも温かいあなたは、たしかに時を刻んでいるでしょう。生きているでしょう。終わりがなくなつて、始まりがなくなつて、いまあなたは私の腕の中で、たしかに生きています。しろばら。

ガブリエルはそこでふつと力を緩め、少女と向き直つた。ごめんねしろばら。 白薔薇 は泣いてこそいなかったが、息をかすかに荒げて、頬を上気させていた。すう、と息をつく。彼女は伏せていた目をゆっくりと上げ、何かを乞うようにガブリエルを見つめた。

「いいんだよ、 白薔薇 。あなたが誰であっても、何であっても」  
私はあなたをあいするよ。

東の間の沈黙があつた。

どちらともなく互いの指が互いの背中へと伸ばされ、せがむように回された。わたしもよ、ガブリエル。

そのとき、二人にとってお互いだけがこの世界のすべてだった。ありとあらゆる音は雑音となり、ありとあらゆる色彩が色褪せて遠退いた。互いのすべてを差し出して互いのすべてを受け取りたいと、ただそのことだけが確固とした欲望と衝動として存在していた。窓の向こうで雷が閃き、一瞬、室内がはつきりと照らし出された。

稲光の中でガブリエルが鏡の中に見た自分自身の姿は、この上なく幸福そうで、そして、淫靡いんびだった。鐘の音が響いていた。

ガブリエルが城を訪れてから三日が過ぎた。その間二人の少女の傍らにはいつも時計があつた。昼は城じゅうの時計を巡り歩き、夜は鐘楼の鐘を聞きながらひとつの寝台で眠る。ときに口論になるまで交わされる会話には、いつも必ずといっていいほど時計と暦と時

間のことが含まれていたし、書庫で背中合わせに読み耽る本もまた、時計の歴史や製作、失われた過去の技術にまつわるものであった。

白薔薇 の時計に関する知識と眼力はしばしば、当代一流の時計師を父に持ち、自身時計師たるガブリエルさえもしのいだ。いや、長く外の情報を手にしていないということさえなければ 機械時計の技術はここ数十年、過去に類を見ない早さで進歩した その造詣の深さはガブリエルなど及びもつかないものであったに違いない。特に、時計という一個の機械を越え、こと時間という概念そのものについてとなると、少女の言葉はなるほど永遠を生きる者らしく深遠で、示唆と思索に富んだものになりえた。二人は互いの欠如を補うようにして、時を忘れて語り合った。

しかし何にもましてガブリエルを驚かせたのは、彼女の一族がその終わりになき命を大いに活用したらしき、時計にまつわる無数の蒐集物であった。時代を越え海を越え、世界各地から集められてきたそのどれもが、信じがたいほど貴重な一級品で、中には時計と人の歴史の一翼を担った品も含まれていた。たとえば砂漠の王朝の趨勢を占った日時計。たとえば錆び朽ちた古の天球儀、その歯車。遙か東方の国で用いられたという朱塗りの漏刻や、ガブリエルも存在の真偽を怪しんでいたいわゆるどこそこの卵、シルグニアの海軍を世界一に押し上げたというあの正確無比なるマリנקロノメーターなどが、精巧な模造品も加えて、城には幾百と置かれているのだった。その歴史的・工芸的貴重さ、蒐集に注がれた情熱は、他のどんな価値とでも引き換えられるものではなかった。

四日目の朝だった。時計師という職種に限らず、とかく職人の朝は早い。ガブリエルは寝起きの悪い 白薔薇 を起こさぬようそつと寝台から抜け出ると、しばし胎児のように丸くなった少女の横顔を見つめた後で、階下の調理場へと足を向けた。元々ガブリエルにとっては、工房の販路拡大のためのいくつかの町の下見も兼ねた今回の旅である。旅程にはある程度の余裕を作っておいたし、長居して何か困るといふことはなかった。むしろ時計師としては、ここに

滞在していたほうがよほどよい経験が積めるに違いない。窓の向この薄青い空を見てガブリエルは自分に言い聞かせたが、そこに大いなる欺瞞おとぎずみが含まれていることもまた、彼女はよく諒解しょうかいしていた。すべては 白薔薇 のためだ。しるばら。少女はこの三日でまたさらに、ガブリエルにとってかけがえのない存在になつていた。

なんにせよ、今日こそは問わねばなるまい。ガブリエルは決意をする。それは曇天のような重い気分を彼女にもたらしたが、しかしいくら伸ばし伸ばしにしたとしても、限界は必ず、そして遠からず訪れるのだ。何よりガブリエルには、 白薔薇 自身がそれを望んでいるような気がしてならなかった。

三度目となる冷たい調理場の空気に身を震わせ、ガブリエルは腕をまくつた。城にある服でガブリエルに合うのは男物ばかりだったため、彼女の姿はますます青年めいて見えた。

「もう。食事はいらないと何度も言っているでしょう」

ガラス窓から射し込む朝の陽射しを背にして、ネグリジエを着た少女が口を尖らせた。曰く人ではないのだからわざわざ食事を摂る必要はないのだという 白薔薇 である。

「まあいいじゃない。それに、どうせたいしたものでもないし」

これまで何度もくり返された問答だった。皿を並べ終わったガブリエルは肩をすくめて食卓につく。広間の卓は十数人で会食できるような大きなものだったが、使っているのは端の部分だけだ。また、並べられたまばゆい銀食器 城にはどうもこうした大仰おおおごうな食器しか置いていないらしい に載せられているのも、食卓や食器と比べればずいぶんと貧相な料理である。というのも、 白薔薇 の言うような理由で城にはまともな食料庫がなく、あつても何種類かの塩漬けがあるくらい、材料の大半はガブリエルがあの方商人から買った干し肉や堅パン、チーズなどに頼る他なかったからである。

「そういう癖に、調理場はしっかりしてるし、食卓はこんなに大きいし」

それにこつちのほうはずいぶんと溜め込んでるみたいだけど？

葡萄酒がなみなみと注がれた杯を示して、ガブリエルはおどけた調子で言ったが、白薔薇は相変わらぬの仏頂面である。

「どうしたの。座らないの？」

「だって、なくなってしまっ」

ここにいたって 白薔薇 の表情はほとんど怒っているように見えた。

「食べる物がなくなってしまえば、貴女は、ここを出ていかねばならないでしょう。そんなのわたし、いやよ」

ガブリエルにとってそれは、思いがけない台詞ではなかった。毎回の食事のたびに次からはいらないと断る少女と、次第に減ってゆく食料を見ていればおのずと察せることである。ふう、と息を吐いて、彼女は改めてまっすぐに 白薔薇 を見つめた。

「ねえ 白薔薇 。これを食べたなら、連れて行ってくれないかな。

鐘楼に」

ちらりだけ驚いたような顔をしたものの、少女はすぐにすべてを理解したようで、その表情は自嘲混じりの寂しげな微笑みへととって代わられた。そうよね。小さくかぶりを振る。

「気づいてしまっ……、わよね」

ガブリエルは無言のまま、テーブルに載せられた皿に目を落としました。普段はうとましい大袈裟な食器たちの、浮き世めいた輝きがいまばかりはなんとなくありがたかった。

気づきたくなどなかった。わかりたくはなかった。けれどこのまま嘘を突き通すには、ガブリエルの中の少女は大きくなりすぎていたのだ。夢の中ではなく、美しく作られた虚構の中などではなく、醜くて苦しい現実の中でもあなたと会いたい。しるばら。そのくせこうやって目を合わせることができないのは、まさしく自分のちっぽけさを表しているようであつたけれど。

ふいに、かちゃんと音がしてガブリエルは顔を上げた。おいしい。席に座り、スプーンを口に運んだ 白薔薇 が泣き笑いの顔をしていた。いままででいちばんね、と。

北向きのためか廊下はまだ肌寒い。この三日ですっかり覚えてしまった城の構造を思い浮かべながら、ガブリエルは 白薔薇 とともに鐘楼へ向かう廊下を歩いていた。

「最初におかしいと思ったのはいつだったの？ ここに入ったとき？」

白薔薇 の言葉に、ガブリエルが黙って首を振ると、じゃあ、と少女は考え込む。

「そうすると……花、かしら？」

ガブリエルはふたたび首を振った。たしかにあの枯れた花や生け垣にも違和感を覚えたけれど、一番最初となれば、そうではない。

「門よ」

「門」

「うん。これだけの年月海からの風を浴びていて、とつくに錆びて腐ってしまったておかしくないのに 現に外側は朽ちかけていたしでも、あの門はそうじゃなかった。内側には錆ひとつなかった。だから、おかしいと思ったの」

水をやる者がいなくなつてから長い月日が経っているはずなのに、土に還ることのない枯れた花。生け垣。錆びない門。埃ひとつ積もっていない調度たち。燃え続ける蝋燭。腐らない塩漬け。たとえ白薔薇 がどんなに努力しようと、一人の少女の世話や手入れが、それらすべてまで行き届くとは考えられない。そこに加えて、毎日きっかり同じ時刻に降り出す雨と、夜ごと鳴り響く、どうやら郭の中にしか聞こえないらしき鐘の音。さらに 白薔薇 がどんな存在であるのかまで考慮に入れたなら、答えはおのずと明らかだろう。

はあ。「じゃあ、本当に、最初からってことなのね」 白薔薇 は大きくため息をついた。顔には笑いとも呆れともつかない苦々しい表情が浮かんでいて、ガブリエルの笑みを誘う。「ごめんなさい」「貴女、それが反省した顔だと思っっているなら一度鏡を見てみることをお勧めするわ」

白薔薇 は今度ははつきりと呆れ顔になって言い、ゆるゆるとかぶりを振って、「まったく」と唇を尖らせた。

「それは、すぐに気づかれるだろうってことはわかっていたわよ。だけど、それにしただって、気づいているならいるで早く言ってくればこんなにも気を揉むこともなかったのに……」

ガブリエルは自分の口元がほころんでいるのを意識しながらごめんなさいとくり返した。白薔薇 は誠意がないと鼻を鳴らしたが、言葉とは裏腹にその口元にもまた、微笑が浮かんでいた。日が高くなってきたせいか、廊下は先ほどより温かくなってきた。

やがて現れた両開きの扉を通って、二人は鐘楼の中へと足を踏み入れた。

まずガブリエルの目を引いたのは、床一面に描かれた精緻なモザイク画だった。それはあちこちに宝石をちりばめた優美で芸術的な天球図で、その周囲や内部、加えて壁には、一角獣や人魚シレーヌ、竜ドラゴンといった幾種類もの架空の生物のモザイク画が踊っていた。それらは頭上から何本となく射し込む日の光と相まって、不可思議な厳粛さを醸し出していた。まるで聖堂だった。いや、白薔薇 の一族にとっては何かにそうであったのかもしれない。螺旋を描いて続く石の階段を昇りながら、ガブリエルはそんなことを思った。

「皆は最後に、城とわたしに魔法をかけたの。それがあの鐘よ。あの鐘の音が毎夜鳴り続ける限り、そしてわたしがここを離れない限り、郭の中は永遠に同じ一日を巡り続ける。わたしと、そしてこの子を除いて」

白薔薇 は懐中時計を取り出してそう言った。永遠にくり返す同じ一日と、決して尽きることなき命。世界がまだ時を刻み続けているということ、時がまだ流れ続けているということ、少女が知る手だては唯一その時計のみであったのだ。

「時計はどうやって送ったの？」

城の外に出ることができないはずの少女が、どうやってドニスの工房に時計を送ることができたのだろうか。尋ねたかった質問をガ

ブリエルがすると、そうね、と傍らの 白薔薇 は微笑んだ。

「私にだつてまだ少しは、友人が残っていた。ということかもしれないわね」

階段を昇りながら 白薔薇 は壁のモザイク画に目をやった。青い背景に描かれた、金の髪の乙女。

「まさか」

「ふふん。さあ、どうかしらね」

含み笑いをして走り出す 白薔薇 。一瞬遅れて階段を駆け上がった先で、ガブリエルは思わず立ち止まり、感嘆のため息をついた。「着いたわよ、ガブリエル」

鐘楼の最上階。三面に開いたその空間を微風が吹き抜ける。ガブリエルは返事すらままならず、部屋の中心に鎮座する巨大な物体を見つめた。それはこの城の名の由来であり、一人の少女を永劫の一日へと縛りつける枷 途方もなく大きな真鍮の鐘であった。

輪郭は一般的な鐘のそれと変わりない。だが、これほど巨大な金属塊を継ぎ目ひとつなく鑄る技術も、ましてその表面にこれほど細密で複雑な幾何学模様を施す技術も、この地上には存在しない。あるいはこれは一切の始まりから、すなわち創世のときからこの形のままここにあつて、悠久の永きに渡り地上の営みを見下ろし続けてきたものなのではないか。見た者にそんな妄想めいた思いを抱かせるほど、それは人智を越えた物体、この世ならぬものであつた。

「魔法というには、ずいぶんと螺子が多いでしょう？」

「…… オルフィレウスの、歯車」

ガブリエルの目を奪つたのは鐘そのものだけではなかった。正面の壁一面と、鐘を吊り下げた天井とを埋め尽くすのは、本体と同じく真鍮製の、大小幾万と知れぬ歯車の群。余韻を引いて振れる巨大な振り子を調速機とするその時計には、動力源がまるで見当たらず、すなわちそれは、この歯車たちが一切の外力無しに稼働し続けていると示唆していた。回り続ける硬貨、流れ続ける水、無限の機関。ありとあらゆる理屈を越えて燃え続ける、螺子と歯車、

金属とオイルとで作られた永遠の炎。それが 白薔薇 の一族が彼女に遺した魔法 祝福であり呪いの正体であるのだった。

「駄目よ、ガブリエル」

「……なにが？」

「共にゆくことはできないわ」

貴女の考えていることなんて、とうにお見通しなんだから。固く握り締められたガブリエルの拳に片手で触れて、 白薔薇 が言った。

「どうして？」

互いに視線を鐘へと向けたまま、二人は言葉を交わす。

「これが止まれば、あなたは自由なんだよ。ここから出ることができる」

だから。一緒に行こう、しろばら。

「駄目。行けないわ」けれど、少女は首を振るだけだった。その声には決然とした響きがあつて、ガブリエルをたじろがせた。「わたしはここで生きる。そう、決めたのよ」

「でも！」

ガブリエルは堪えきれず 白薔薇 を振り向いた。

息が、止まった。

重々しく風を切る振り子の音と、はるか遠く、岸壁に碎け散る波の音。吹き抜けてゆく潮風のささやき。ちょうど昇りかけの太陽があまねく地上を翳<sup>かげ</sup>らせて、世界はひととき、ガラス細工に閉じ込められた。

しろばら。

一輪の花。

凍りついた世界の真中で、少女は笑っていた。白い、薔薇のような笑顔だった。

「聞いて、ガブリエル。わたしはここで生きる。そうするほかにないのよ。言ったでしょう？ わたしにはね、もうここでしか生きることができないの。わたしたちは、影ではなくなってしまうから。」

わたしたちのような、まやかしゃ、幻や夢の中の、闇夜の生き物たちは、これからはもうおとぎ話の中でだけ、語り継がれてゆくべきなのよ」

けれど。白薔薇 はそこで言葉を切った。一步近づき、両手でガブリエルの手をとる。

ガブリエルの見つめる先で、白薔薇 のか細い指が、固く握りしめられた彼女の拳をほどいてゆく。人差し指から順にひとつひとつ、丹念に、絡まった糸をときほぐすようにして。やがて開かれた手を、白薔薇 が自らの胸へそっと押し当てたとき、ガブリエルはいつの間にか自分が、彼女の前にひざまずいていることに気づいた。手のひらを伝って、とくり、とくりと、心臓の鼓動が伝わってきた。

聞こえるでしょう。白薔薇 は笑う。忘れたかしら。教えてくれたのは貴女なのに。ねえ、ガブリエル。

「貴女に出会えたから、わたしは生きられる。これから、ずっと。生きることが出来る。たとえ終わりがなくても、始まりがなくてもこの鐘が、永遠にわたしをこの一日の中に閉じ込め続けるのだとしても、わたしの時計は変わらずに針を進める。この心臓は動き続ける。だから、ガブリエル。貴女はとこしえに、わたしの、たったひとりの、」

いとしいオルロージェ。

あれはいつのことだっただろうね、しろばら。いまではもう、ずいぶん昔の、はるかに遠い昔のことのような気がするけれど。私はあなたをこの腕に抱いて、そしてあなたは私の胸で泣いた。声を立てずに、たった一人取り残されるその孤独を恐れ、あなたは泣いたね。しろばら。けれどお願い。今度だけは、私があなたにそうすることを許して。あなたの小さな体を抱きしめて、私とあなたのために泣いてしまっ、私を許して。しろばら。

あなたは孤城の一輪花。

あやすように抱いたガブリエルの頬を、髪を、少女はたおやかな

指で、くり返しなぞった。いつくしむように、いとおしむように。そのすべての輪郭を、髪の感触を、体温を、においを、記憶の中に留めようとしてもするように。

長い時が流れた。幸福なひとときだった。高い高い石の塔の上で、二人の少女はそのひととき、この地上の誰よりも幸福だった。

「ガブリエル」

どれくらいそうしていたのだろう。ふいにふわりと、花の香りが鼻先をかすめて、ガブリエルは目を上げた。しろばら。青い瞳がいとおしかった。風にさざめく白い髪が、その微笑が、触れる体温が、ささやく唇が、少女を作る何もかもが、少女の生きるこの世界の何もかもがいとおしかった。ガブリエルはまぶしそうに目を細めた。南の空を漆黒の雲が覆うのが見えた。

そう、たとえどれほど幸福なひとときでも、いずれ終わりは訪れる。

けれど。それが生きるということなのだから。あなたの望んだことなのだから。そう思えば、それでさえも、私の幸福のひとかけら。

「なあに、しろばら」

ガブリエルは涙を拭い、笑いかけた。

「あいしているわ」

その唇に薔薇の花びらがひとひら、触れた。

そのとき南の空に浮かんだ黒雲を、一条の光芒「ひかり」が貫いたと思ったのは、ああ果たして、現「ま」のことであったのか。

\*\*\*

人と時計の歴史は長い。しかしその長い歴史のどこを紐解いたとしても、かつてクナルフの地に生きて、そして死んだ、一人の時計師の名を知ることはいかないだろう。

けれども、あなたが本当にそれを知りたいと望むのならば。地の涯「はて」、潮風の吹く岬に立つ、ある城を訪れるといい。

そこには数えきれないほどの時計たちに囲まれて、一人の少女が生きている。

高い鐘楼の上で、あなたがもしもこう尋ねたならば、彼女はきっとその名を教えてくださいるだろう。

あなたのあいした人の名は。

永遠の午に咲いた薔薇 了

## (後書き)

### 参考文献

執筆にあたり、以下を参考にさせていただきました。

『ブレゲ・天才時計師の生涯と遺産』エマニユエル・ブレゲ（スウオッチグループジャパン）

『MECHANICAL WATCH BIBLE 機械式時計バイブル』（スタジオタッククリエイティブ）

『図説 時計の歴史（ふくろうの本）』有澤 隆（河出書房新社）

『ビジュアル博物館 第65巻 中世ヨーロッパ』アンドリュー・ラングリー／池上俊一（同朋舎）

『城（ビジュアル博物館）』クリストファー・グラヴェット／ジェフ・ダン（同朋舎出版）

およびその他、Wikipediaをはじめとした多数のウェブサイトを。

### あとがき

本作は友人のくらさんからのリクエストをお受けして執筆したものです。頂いたテーマは「中世ヨーロッパの壊れた時計」でした。分量はおおよそ21000字、原稿用紙換算で50枚ちょっとです。厳密には一人の読者のために書いた作品ではありませんが、みなさんの心に何かを残せたなら、それが私の幸福です。

以下、ちょっとした小ネタみたいなもの。

・中世ヨーロッパ……？

あー実は頂いたテーマは「中世ヨーロッパの壊れた時計」とのことだったので、本作中の時代は明確には決めていませんが、たいい19世紀後半を想定していて、それって全然「中世」じゃないよね……（白目）

いわゆる「中世」といわれる16世紀には、まだまだ機械時計産業というのは発展途中で、私の技量では物語に上手く組み込めなかったのです。ほんと体たらくとはこのことです。

・国名

本作はファンタジーですが、史実を下敷きにしています。なので、もしや気づいた方がいらっしやるかもしれませんが、作中に登場した二つの国、クナルフおよびシルグニアは実在の国をモデルにしております。どこなのかはあえて言いませんが（すぐにわかるだろうし）、両国ともその国の言語を英語表記にしたものを反対から強引に読んだ感じですよ。

・ルビについて

作中いくつかの言葉（主に時計用語）にフリガナが振ってあったり、台詞中に出てきたりしていますが、あれはすべてクナルフの言葉になります。つまりモデルとなった国の言葉なわけですが、あくまでクナルフ語でありモデル国での正確な発音ではないということに断っておきます。ちなみにオルロージュが「時計」でオルロ（ー）ジェが「時計師」です。あと、いくつかなんの説明も無しに専門用語的なものを出してますが、ほとんどはネット検索にかければすぐにヒットする単語なので、もし気になるようであればどうぞ検索してみてください。もう少し作品を楽しめるかもしれません。

そんなわけで、長々と書いてみましたが、これにてあとがきです。お付き合いいただきありがとうございます。ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5358u/>

---

永遠の午に咲いた薔薇

2011年7月9日03時24分発行